

創造性なきところに発展はない

杉本俊也

現在、我が探検部ではその活動を「企画制」という制度により行っている。しかし現状は次々と新しい企画が生まれるだけでなく、ただ漫然と旧来の企画（プロジェクト）を継承しているにすぎない。いわゆる「パート制」と変わらないのである。その必然性がある、生まれてくるべくして生まれてきた企画制のはずであるが、その機能を十分発揮するには至っていない。

探検部に入ってくる全ての人間は皆、探検に対する夢を持っている。それはそれぞれ十人十色、様々であろう。それが既成のプロジェクトに合致する場合ならともかく、それ以外の夢も多くあるはずである。そう考えると、もっともっと新しい企画が出てきてもよさそうであるが、実際はそうではない。

社会全般に言えることであるが、人は夢と現実のギャップに悩み妥協してゆく。探検部の中でもそれは例外ではない。夢は夢として持ちつつも、その実現性の困難さ（資金、人数、クラブ活動としての承認、etc・・・）を考え、より近いプロジェクトへと妥協して流れてゆくのである。一つのプロジェクトが長く続くことは技術面、装備面、その他あらゆるメリットがあり、クラブ経営？としては好ましいことである。しかし探検ということに夢とロマンを感じる者であれば、やはり押し付けでなく、自分で描いた夢をなんとか実行したいのではないだろうか。

探検すべき地理的フィールドが無数にあった時代ならともかく、既成の概念における探検のフ

ィールドが極端にせばまってきた現在、固定的な観念（パート制）では今後の発展は望めぬのではないだろうか。

クラブとして企画制を打ち出している以上、もっと各人の夢を前面に押し出してもいいのではないか。それがたとえ一人でもいいと思う。ヘディンのはじめのうちはずっと一人で歩いている。河口慧海も一人である。単独でも十分探検はできるのだ。

一方、無制限に各人の夢を取り上げ過ぎると、社会的に探検と認められぬ自己満足だけに終るものが増え、クラブの活動レベルの低下を懸念する意見がある。確かにそうかもしれない。人間とは弱いもので、制限をもうけないと軟弱な方へ軟弱な方へと流れてゆくものである。しかし若い我々の探検に対するあり余る情熱は、決してそれを許さぬであろう。

また、自分自身がこれこそ探検であるという信念を持っていれば、他人が何をしようが、何を言おうが関係ないではないか。自分の信ずる道だけをつき進めばいいのだ。人それぞれ探検観の相違があり、自分の信ずる探検観からはずれる活動は、批判的になるのが当然であろう。しかしもともと各人の探検観は違っており、どれが間違っているとは言い切れない以上、それを批判するのは筋違いだ。

そうして出てきた創造性ある新しい企画こそが今後の我部の発展をにやうものとなるのではなからうか。

（26代）